

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京3-128022
 印刷／(株)ドモン企画



絵・中島 英子

しゅうかく

恐れるな、小さい群れよ

(ルカによる福音書 第十二章三十二節)

理事長 福島 勲

今日、日本のキリスト教徒は、新旧教徒合わせて百万人を少し上回ったところであろうか。

明治維新とか太平洋戦争の敗戦後は、キリスト教にとって絶好の機会と思われたのも束の間で、引き潮のような情勢で今日に及んでいる。

仏教の伝来が五五二年頃と言われるが、教典が正式に朝廷に献上されたのは五三八年(宣化天皇三年)、これでもって曾我物部の両氏の争いとなっている。然し聖徳太子によって仏教は興隆した。

神道は縄文時代から人々の生活の中で生きていたと言われる。惟神(かむながら)の道などと称されたのは江戸時代からだと言学者は言う。

構えることのない神道の領域に哲学めいた仏教が、さりげなく入り込み人身を収攬した。

しかも難しい教理が簡素化されて生活に直結した。

豊作とか疫病駆除、災害から

護られるとの教えや実践で、人々の心を掴んだのである。そして仏教は唯一絶対の仏などと強調することはなかった。

東大寺建立に際しても、国家国民に利益をもたらす為として、大仏の鑄造完成の為に、宇佐八幡神入京して託宣されたのである。

その後周知のように、本地垂迹説を立て、神仏共存の策を弄した。もし相互に絶対を主張し合ったなら排撃し合うこと必定である。

ようやく明治になって神仏共祭は神道側から否定されて廃仏毀釈が行われた。

しかしこの時は、早や仏教の存在は厳として動かしがたいものになっている。

キリスト教の渡来は、一六世紀ザビエルらによってであるが、仏教や神道さては支配的権威者らによる迫害にあつて、伸びては摘まれる芽のように波瀾極まりない道を辿った。

人々の求めたものは、宗教に

三重苦の克服

施設長 今関 公雄

よる可視的な福祉や利益であつて、魂の深層の問題ではなかった。唯一絶対の神の罪のゆるしなど問題ではなかった。日本人には絶対の観念がない。分らないのである。

司馬遼太郎、ドナルド・キーン「世界の中の日本」(中央公論社)の中でも、この点に言及している。多神教か、汎神論か、あるいは拝一神教の中で、人々は何の不思議も矛盾も感ぜずに安住している。

単的に言うならばキリスト教が純粹に唯一絶対神とキリストの十字架にみる愛と贖罪の絶対性を説いている限り、我国では小教集団であり続けるであろう。高踏的に小教であつてよいとは言わないが、小教である事を恐れて、卑劣な策を弄し、真理を歪曲してはならない事である。

イエスは敗北主義に陥りそうな弟子達に、小教者である事を恐れるなど忠告し、励まされる。御国を下されることは、天の父なる神のみ旨であると言明される。

我々にはみ言葉を信じることをのみが残されている。

今年の七月より開設八年目に入りしました。お陰様で、高校生二、中学生四、小学生二二、幼稚園生二で定員を満たす三〇名が元気に生活しております。

施設養護の只中に開設時より身を置く事になり、改めて仕事の重さと厳しさ、そして喜びを味わっております。

入所以前の劣悪な生育状況と生育歴などによる心の外傷に心が痛みます。そして入所してから集団生活への対応に配慮の限りを尽くします。

光の子どもの家の子どもに対する地域社会の偏見や差別に憤りを覚える事もしばしばです。これらの三重苦い或多重苦の克服が養護施設の社会的責任と言えます。

考えてみれば、私たちは厳しい現実の中にあつて、生活の安定と豊かさを生み出す「経済、人間関係、生活空間」など、深刻な弱点を内含しているのです。人間関係では、家庭で展開さ

れる血縁による運命共同体としての絆に比して、施設でのそれは赤の他人同士の集団的なものであり、断絶をも容易に伴うものであります。職員の未熟さも覚悟しなければなりません。

家庭生活における生活空間、生活時間、経済などの総合した状況の弾力的で、自由な裁量が可能で、自発的で小回りのきく生活づくりは、施設で至難の技で、生活は受け身に傾斜します。

家庭の本質的機能は「パーソナリティの安定と子どもの社会化」で考えられます。これはアウト・ホームな家庭生活と親子生活の生活風景による生活教育力により形成されます。

光の子どもの家では「職場で子どもは育てない」「仕事で子どもを愛せるか」などが創立当初からの課題になっております。親に捨てられ、心に深手を負つて地の果てに追われた思いの子どもにとつては、施設での暮らしの内実は「親替わり、家庭替

わり」のものとなり、単なる仕事場にしてはならないのです。

また、ウマの合わない人間関係はよくみられ、担当児童を始め全ての子どもを愛することが至上命題であり自己変容を自覚してのものです。

このため、光の子どもの家では、担当者一人に5名以内の子どもを配して小教責任担当制をとり、一軒10人以内の子どもの生活をつくつて、家を形成しています。家屋や養育内容は小教制を採用し、食事、入浴、執心などの暮らしを可能な限りブライバシーを尊重します。予算執行の自由裁量の枠を家に渡して家計簿をつけながら経済生活をも共有してきました。

職員も八年目を迎えて暮らしの風景も落ちついてきました。最年長が高校一年生になり、二年後にやってくる社会での生活の自立をみると、多くの不足と不安を覚えます。

今後とも三重苦の克服に向けて心を新たに歩みます。何よりも神の子光の子として、生まれてきてよかったと思える生活づくりを基盤にして・・・

エッセイ

猫

中島 陸雄 (県立高校教諭)

先日、早朝、玄関の内側の板

の間に、五十センチぐらいの蛇がいた。猫がどこから捕まえてきたのである。猫がとつてくるにしては大物だった。もう生きてはいないと思つた。ところが突然動き出して、奥の方に向かってしゅるしゅると、意外な速さで走つた。私は急いで彼のしつぽをつかまえて、外の草むらの中に投げ込んでやつた。

私の家には今、親猫一匹と子猫三匹がいる。子猫は生後五カ月ぐらいで、ものすごいいたずら盛りである。いたずらであると同時に、ものすごい甘つたれである。親猫と体の大きさが余り変わらないくらいに成長したくせに、すぐ親猫のおっぱいにしがみついて、まだ小さかつた頃とその格好は全く同じだ。

子猫は親猫に甘えている。そして親猫も含めて猫達は、家内に甘えている。その甘え方と言つたら、人間と猫の間に心の交流があるのではないかと思われ

るくらいだ。

朝、家内が起きる頃になると、四匹の猫は部屋のドアの前で待っている。みんなでごそごそやつたりしながら「おばちゃん、早く起きてよ。」とでも言うように、ドアをカリカリと爪で引っかいたりするのだ。そして家内が起きていくと四匹が一斉にか内の前を走り台所へ向かう。そこで餌をもらうと一段落で、みんなうち揃つて外へ遊びにでてしまう。

家内が洗濯物を干すときは、猫達も一緒に外について出る。そして決まって、近くの松の木や柿の木にかけ登る。その身軽さは素晴らしい。子猫は今、急激な成長期で、全身に力がみなぎり、柔軟に動くことができる。自分の体の可能性を、思いきり広げようとしているのかも知れない。その洗濯物をたたむ時にも、いつも家内のそばにいて、猫は新しい物が好きと見えて、今たんだばかりのバスタオル

やシャツの上に乗れたがる。そしてそこにしゃがみ込んで、一時の安息の場としてしまうのだ。この猫たちがノミを取つてもうとうとときの姿ときたらぶざまである。両足を広げてだらしない、首や腹のあたりに逃げ回るノミを自由に取らせて目をつぶつたままである。外を飛び回る姿や、廊下や部屋の中でじゃれ合いふざけ合っているときの、美しくさえあるあの素晴らしい俊敏さは、どこにもない。

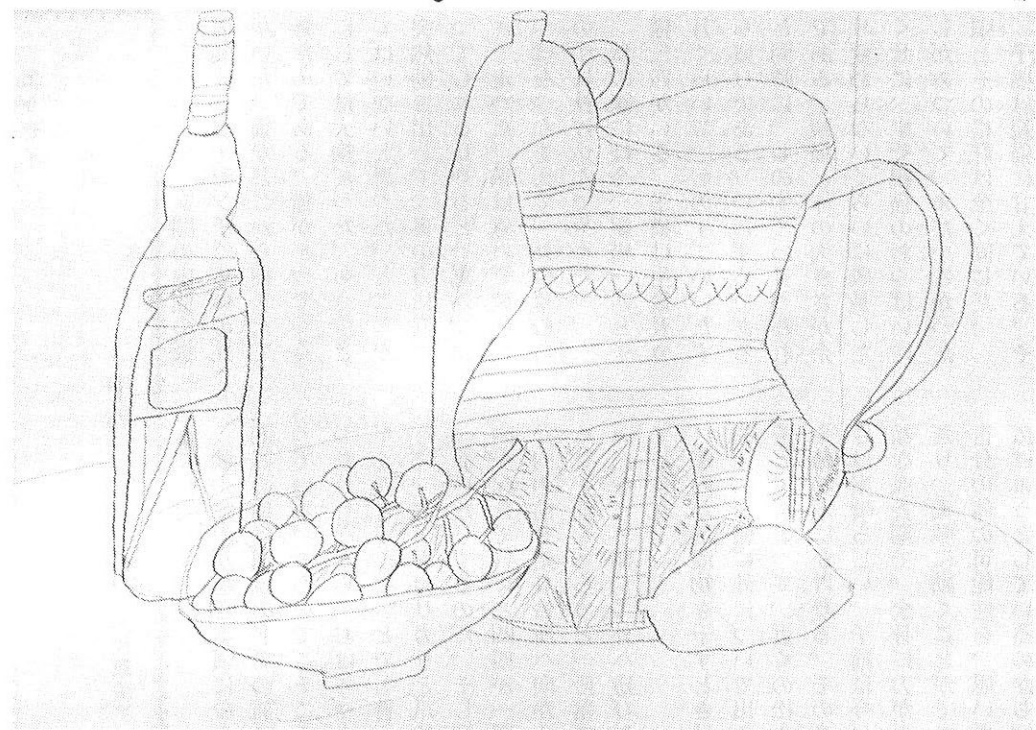
夕方近く、家内が台所のテーブルで新聞を読む頃になると、猫たちは椅子の上に二匹、三匹とかたまつて眠りこける。もうそうなつたら、少しぐらい手や足をいじつても、殆ど意に介さない。人間に対する完全な信頼感、そしてそれによる安定感。私は、家内と猫たちの姿を非常に面白くみている。産まれたばかりの子猫から、大事に大事に扱ってきた。かといって、いわゆる猫かわいがりではない。基本的なしつけなどは、根気強く続けた。そんなことの繰り返しをして約五ヶ月、猫たちは人間を、少なくとも家内を、完全

に信頼しているように見える。そして猫たちは、人間の周囲にただで安定し、思いきり元気に遊んでいる。そのうえ、草や葉っぱやせみや蛇、それにとかけから芋虫に至るまでなんでも運び込んで見て見せようとしている。

現代社会における人間の親子関係のひづみについて考えさせられてしまう。子どもの成長には、下手な小細工は要らないのではあるまいか。小細工を弄するよりも、母親または父親がそばにいてだけで子どもが安定するような絶対的な信頼関係、そんなものが先ず必要なのではなからうか。

余りにも純心で、のびのびと元気に成長する猫たちを見てみると、生きるものの根底にある愛情とかお互いの信頼関係と言うようなものについて思い知らされるような気がする。

子育てには失敗続きのダメな人間が、自分のことは棚に上げて、そう考える。こんなことを言うなんて、老



子どもたちの季節

仙道家

2学期の始業式があった日、研一君を訪ねました。お父さんに引き取られ、まだ五カ月しか経っていないその部屋には、もう何年も一緒に生活しているような雰囲気がありました。久しぶりであったこともあるのでしょうが、私が知っている研一君とは別人のように緊張して無口な彼の姿に、時の流れとそれに付随するかのよう人間関係の距離を感じました。以前は、一緒に入浴までし、就寝前にはおぼずりまでした仲であったのに、などと自分の立場をわきまえず少し寂しい思いがしました。今年の四月、研一君の引き取りが決まり、それを家の皆に伝えた時の「本当？」と私を振り返った彼の顔を思い出します。みるみるうちに目に涙が溜まってきたあの顔を、お父さんと暮せることはとても嬉しいことに違いはないのですが、兄弟のように長年共に過ごした友と別れることも彼にとっては寂しかったのだらうと思います。そこまで育っていた彼等の友情を、彼らの思いを心から嬉しく思いました。

お別れの挨拶で、唇を噛みながら一生懸命最後まで言おうと頑張っていた研一君。その姿を見つめながら、もう、一つのことが終わってしまったように思っていたのですが、こうして家庭復帰した後、も家庭訪問などしていると、この仕事に終わり等ないのだと改めて思います。私たちができることなんてそう多くはないことは、今までの年月の間に身をもって知らされています。が、研一君の三歳から十歳までという彼の人生の大事な時間を共に過ごしてしまった、もつと言え、主に関わってしまったという責任は、担い切れないと思いつつもこれからは私の中に残っていくのだらうと思います。研一君やお父さんの迷惑にならないよう願いながら、二人の生活を心から応援する者として関わっていかれたらと思います。少し寂しかった仙道家に俊君がやってきました。また、新しい子どもたちとの新しい季節が始まります。

岩崎まり子

原田家日記

わが家の長男悟は、高校最初の学期大きく揺れた。様々な問題から高校を中退して就職をも考えなければならぬところまで自らを追い込んだ。

そんな彼に元職員から話があつて、栃木県の肢体不自由の子どものための2泊3日のキャンプのボランティア活動に参加した。初めてのボランティアの体験であり、車椅子に触る事も始めてである。これまで、与えられることに慣れた悟が、体の不自由な人たちに会ってどんな体験をする事ができるのか。そのことで彼の世界観が変ってくれることを願った。ボランティア・セラピー効果も期待した。不安と期待をないまぜにして送り出した。

キャンプから帰ってきた彼は目を輝かせながら三日間の体験を語ってくれた。

そこで出会った小学1年生の車椅子の男の子に心を大きく動かされたようだ。小さい体で一生懸命車椅子で生活しているそのことは大きな衝撃だった。彼は凄いと絶賛する。悟のその子への純粋な愛を感じた。そこで出会った彼とそう年も変わらない若者である大学生のボランティアの人たちのひたむきな働きにも感銘を受けたようだ。来年もこのキャンプに参加したい、と今から楽しみのおようである。悟のこんな素直な顔を見たことがなかった。

「オレさあ、福祉の才能があるんだって、そう言われたよ」そして彼は将来、出会った少年たちのような体の不自由な人たちのために働きたい。福祉の仕事をしたいと言いだした。そのために大学へ行って福祉の勉強をする、と。彼は将来の夢を語りだした。

少年がはつきりと自分の未来について具体的なイメージが持てたとき、一つの段階を超えると教わった。

一人の少年との出会いが彼にこの夏一つの段階を超えさせた。子どもたちの成長にとって本当に必要なものは・・・改めて考えさせられている。機会を与えて下さった先輩に心から感謝。穴水祐介

まなざし

佐藤家

石毛 照子

こと更に酷い残暑も遠い昔のことに、もう冷たい風が流れる日もしばしばになりました。

蒸し風呂のように暑い日やうそ寒い日が行き来したこの夏の日の美しい思い出話で今も時折食卓をにぎやかにしてくれます。

お盆に帰省できない子どもたちと千葉県館山にある都立船形学園にお邪魔して、海水浴を楽しむことが出来ました。いつものメンバーから睦男が受験勉強のために抜け、鷹文、權也、珠弥です。

お盆の前夜には、半年間も待った子どもたちが、それぞれの家に家族や親戚の人たちに迎えられて帰っていきます。その友だちを、「行ってらっしゃい」と見送ることしかできない子どもたちは、どんなに頑張っても家族関係を追跡し、調整しても残るのです。

自分は帰ることが出来ないで充分知っていたながら、見送ることしかできない彼らの心の中はどんなだろうと、その度に考えさせられてしまいます。そんな寂しさをほんの少しでも埋め合わせることが出来るならば・・・と思い、多くの方々のお力をお借りして、楽しいお出掛けを工夫して実現するのです。

ご飯もそこそこ、早く行こうと、渚へ誘われる毎日でした。六年生の鷹文は、臆病だが足がしっかりと深さで時を惜しんで波と渡り合い、權也は琢木のように日がな蟹と戯れ、珠弥は唇を青くしながら、もう出なさいと言つても聞く耳を持たない様子でした。こんなひとときが彼らの人生を輝かせるための光源のようになって、悲しいときや、苦しいときを支えられる力になってくれるように祈りながら、居続けることがこの仕事の基本だと言われたことによつていこうと思いました。

今回は、ひよんなことが縁で、船形学園の所長さんはじめみなさんの大変な歓迎と、お心づかいを頂き、子どもたちに楽しい美しい思い出をたくさんつくって下さいました。改めて心から感謝します。

現場から

いつでもいつしよ！(II)

五来 淑子

子どもたちの夏が、今年も元氣一杯やってきて、一人ひとりの心にさまざまな思いを残し去って行きました。暑く、そして長い夏休みにはたくさんのプログラムが準備されます。

帰省をはじめとし、帰省できずに残っている子どもたちとの二泊三日の海・や、山登り、キャンプなど子どもたちは、それを楽しみにして宿題に取り組み、家のお手伝いをよくします。その中で、帰省は夏休み前からそれぞれの子どもが帰省先を家庭訪問し、調整します。

渥美姉妹は、七月に家庭訪問し帰省のお願いをしました。帰省先になる会津の山の中の父方、盆地の母方の実家は、姉妹を心待ちにして下さいました。姉がここへ来てもう五年目です。妹は三年目。祖父母宅へ帰省が出来るようになったのは、二年ほど前からです。渥美姉妹の場合、両親と姉妹・家族揃って里帰りが出来る

のです。今年もお盆中に母と祖母が迎えにきてくれて、列車で会津まで行くのです。祖母は朝早く会津から出てきました。

帰省する日、二人を呼んでお話しをしました。「おばあちゃんね。」「それだけ言っただけで、二人の顔は輝いてきます。そしてすぐ「おばあちゃんに行くの？」と急ぐように聞きます。小さな妹は、ぴよぴよん飛び跳ね、回ります。決まって嬉しいときはこうなのです。「ふたりの顔が見たいから遊びにおいで。」だって！」

二人は舞い上がり有頂天です。四つも年下の詩美を連れていくにはまだ二年生の悠子にはとても大変なことです。私が、「詩美ちゃんはお留守番がいいかなあ、連れていくお姉さんが大変でしょ」と聞くと、「ん？でも、独りじやつまらないよ。詩美ちゃんいた方が楽しいそれに、お留守番じやヤダッと言うよー」と、援護。

いつも帰省から帰ってくると「詩美ちゃんね！」と、大変だったとサインを送る悠子なのに。やはり、本当の姉、本当の姉妹だと思えます。

「いつてきます！」と。親と一緒に帰省できるという時間を持つ子どもは、ほんの数えるくらいいません。子どもたちにとって、本当の家族と一緒にの当たり前の時間を、当たり前前につくことが出来ない子どもがこんなにいるのです。家族との時間を持つたとき、子どもたちの心は、どんなに暖かくなるのでしょうか。

まだ幼い姉妹は、そんな気持ちを素直に喜ぶことが出来ます。またこの家へ「ただ今！」と帰って来ると、楽しかったお話しが山々。「おばあちゃんね、何が食べたかったか聞いてから、パンついで言ったら、朝ご飯パンだった！」と、パンの大好きな悠子。「おじいちゃんには、大つきなねこがいるんだよ！」と、好奇心が旺盛で大胆な動物好きの詩美。「また行きたいね！」と二人。そんな楽しい思い出をつくつてくるのできて、よかったなあ！と深々と思えてきます。三日も会わずにいると、いつも怒ってばかりの私も、さすがに、二人の帰りが待ち遠しくなります。ケンカしてないかなあ。もう寝たかな。と、いつか思いは二人に流れているのです。いつも三人で寝ている六畳がなんと広く思えてなりません。短か過ぎる帰省が終わり、この家へ帰ってくる時は、両親とも、離ればなれになってしまふ時。「もう帰るつちゃうの？」「なんで泊まっていけないの？」そんな寂しい言葉に変わり、とたんに表情の輝きが薄らいでしまします。子どもたちの心はどんなに寒いのでしょうか。ここに残る、悠子を、詩美をどう迎えようか、と待つのです。それぞれの心に残る家族と一緒にの時間を、成長へのエネルギーにしなければなりません。帰省する度に抱えきれないほどの楽しい思い出を経験し、心に染み込ませてくる二人。でも、その同じ心の中に、寂しさや不安もまた同じくらい抱えて帰ってくるのですから。

養護メモ 39

真実告知(この項完結)

菅原 哲男

看護は、ある時は薬や手術よりも重要な役割を担っている。痛みや不快に耐え、病や傷の治療を待ち、快復する力を養い、そして、生きる希望を持たせる。真実を告知する前に、綿密な検討と確認を繰り返した。

子どもたちはうなだれて並んだ椅子にかけた。私は一人で彼らの横に直角に座った。

何故ここにいないければならぬのかを対話するように心がけてもう一度確認した。

ここで数年生活してみても、こよりも行きたい施設があるならば行ってもいいことをできるだけ丁寧に話したが、そんなものはないと言う。

そして、施設にいるのがいやだという。それはそうだが、誰がぜひ施設で暮らしたいなどと願う者があるのか。

それでも、なぜここで生活しなければならぬのかについて話し合った。

看護は、ある時は薬や手術よりも重要な役割を担っている。痛みや不快に耐え、病や傷の治療を待ち、快復する力を養い、そして、生きる希望を持たせる。真実を告知する前に、綿密な検討と確認を繰り返した。

子どもたちはうなだれて並んだ椅子にかけた。私は一人で彼らの横に直角に座った。

何故ここにいないければならぬのかを対話するように心がけてもう一度確認した。

ここで数年生活してみても、こよりも行きたい施設があるならば行ってもいいことをできるだけ丁寧に話したが、そんなものはないと言う。

そして、施設にいるのがいやだという。それはそうだが、誰がぜひ施設で暮らしたいなどと願う者があるのか。

それでも、なぜここで生活しなければならぬのかについて話し合った。

であろうことなどを説明した。入所して間もない頃、些細なことでも「ぶつ殺してやるっ！」

「死んじやえ」などと怒鳴り、取っ組み合いの毎日だった。子どもたちどうしの話で「オレのお母さん、お父さんに。だよ」などと、事実よりも惨く表現していた。春子にもその記憶はあったのか、意識下に抑圧されていたのかも知れない。

帰省の折りに家族や親族がそんな話をしていたかも知れないし、お節介者が不用意に事実を誇大に伝えたのかも知れない。このことを確認したときに二人はそれほど動揺やショックを表現しなかった。

だから、これからどうすればいいのかわからない話を進めた。兄もそうだが、特に春子はカッとなつてたことで素晴らしいことはなかったことなどを確認し、激情に流されないことが課題だと、まとめた。

後は、一ヶ月休み返上の担当者、職員たちの看病に任せる。祖父や叔父叔母にも可能な限りの来訪(お見舞)を事前に要請し、約一ヶ月間の間接的も含

めたスキンシップなど看護を主体とする関わりを展開した。

養護施設の子どものために真実告知は困難で重要な課題である。苦しく思まわしい事実を突きつけられる。それでも過去を受け入れないと前へ進めない。多くの養護施設の子どものように、利他的に今だけしか生きれない存在のままで。

糸賀一雄は、重症心身障害児について、彼らは明日を悩まないうという救いを持っている。と書いています。障害さえなければ未来を悩むのが人間なのである。未来はどのように獲得され、イメージされるのだろうか。乳児は現在を生きている。少年は昨日を作文に書き、明日天気になれ！と願う。

過去を受け入れなければ、未来は望めない。養護施設の子どもの多くは、過去を曖昧にしたままである故、未来を持ってないからなのだろうと考える。シユプランガーは言う、青年は、過去と未来をつなげて生きようとするものである、と。

日誌抄

四月一日
四月一日まで
六日月日まで

四月一日 新年度開始。

○六年有余母親が親権を持ちながら引き取り不能、離婚の父親には意地で拒み続けている

花伊研一の親権変更と父親の準備は整っているなどから引き取りの実現に引き続き訪問、話し合いなど調整を急ぐ。

○栗原忠さん、お励まし。感謝。

二日 原道小学校校長、教頭新任のご挨拶に。

○大利根剣友会坂東先生高校入学のお祝いにご来訪。感謝。

三日 しずくの会、草取りご奉仕。いつも・・・感謝。

七日 母親との合意成立して花伊研一父親宅へ引き取り。

○かもめ文具店より鯉のぼりを八日 大谷さんよりレタスを。

○新学期開始。幼稚園一名、小学二一名、中学四名、高校二名が、希望と不安を抱えて。

十日 小川さんより夏美柑を。

十三日 江森ハヤサロン散髪ご奉仕。今年度も！感謝。

二三日 山野井さん生活物資を。

二四日 八王子SOS子どもの

村より保母さん見学と交歓に。

二六日 日本キリスト教団東大宮教会壮年会より、高校生の教育費の一部を継続してお支え下さると。感謝を心から。

二七日 東京から学習指導においで下さった田中ゼミナールの田中博正先生より高校生へ励ましのお手紙とお祝いを。

五月一日 神奈川の杉森さんより電子レンジを。ありがとう。

二日 鷺の宮町の斉藤氏物品を。

四日 第七回子どもまつり。いつもの飯田さんのアルトサク

クス、アツシアの民族音楽、久喜高校音楽部の合唱、竹下

由布子先生のご指導、江崎さんのロックバラードなどでお

おいに盛り上がる。地域の子どもも五十名余りも参加して。

踊り、歌い、演技して、鑑賞もたっぷり。

六日 五年前に家庭引き取りの笹恵子の母が先月窃盗で逮捕、市営住宅の家賃の催促が、再入所の可能性。取組みを再開。

十三日 北川辺町の椎名、柿沼さんより果物をどっさり。

十八日 夏休みの生活と行事についてのプログラム委員会。

十九日 江森さん散髪ご奉仕。

二二日 第三十回理事会開催。事業報告、決算承認など。

二五日 学校よりの家庭訪問開始。頑張っている子どもたちの様子を伺い課題の確認を。

二七日 児童福祉週間記念事業第七回講演会。横浜市の旭児童ホーム伊達直利先生が「変わりゆく施設養育・分散小規模化の現状から」石川県の聖霊愛児園安川実先生が「人格形成・養育することと自立すること」をテーマに。先

駆ける問題意識と具体的な実践、冷静な観察と熱い思いを、刺激的な一泊二日。県内施設の仲間延べ三十八名も参加。

二八日 原道愛育班と後援会役員会の合同夕食会。

二九日 稲葉、佐藤、加須の梅沢、北浦和の鈴木、桶川の向後各氏より、果物、食料品を。

六月九日 国際婦人福祉協会よりマイクロバス（ニッサンシブリアン二九人乗）のご寄贈。贈呈式が首相官邸で。感謝。

十五日 江森さん散髪ご奉仕。

二八日 岩槻教会高校生会が来訪して楽しく。

反射光

八年前にやつてきた幼稚園児が中学生になり、

もう殆どの子どもたちが思春期に入りました☆幼い頃は平気だった一言に尖っていい、反抗します。背丈も職員を超え可愛かった仕草なども消え、言わずもがなの一言も出易くなり、熱くなつてやりあい、関係がスレ違うこともしばしばです☆願つて光の子どもの家をつくりましたが、本来子どもが集団で暮らすことなど異常なのです☆父や母の自己愛が子どもの幸せとスレ違い、最初の異常を子どもへ転嫁しました☆人様の子どもを育てる向こう見ずな働きですが、私たちは養護施設でそれを始めたのです☆スレ違う危険を多く含んでいる上に足りないこととの多い関わりです☆「子どもたちのための子どもの施設」の運営を！と願つた初志に返つて励みます☆スレ違わないように同じ方向を向きながら・・・「愛する」ということは、お互いに見つめ合うことではなく、一緒に同じ方向を見つめることだ。」

（サンIIテグジュベリ）（哲）